『関西大学社会学部50年史』を編む

片桐新自

はじめに

二〇一七年四月一日に関西大学社会学部は創設五十周年を迎え、同年九月三十日に、『関西大学社会学部50年史』を刊行した。関係各位のご協力を得て、大変立派な書籍として完成することができ、読まれた方からは「家宝にします」とか「棺桶に一緒に入れてもらいます」といった最大級の賛辞をいただいている。私は、編集委員長として、この書籍刊行に深く関わらせていただいたので、この場をお借りして、書籍刊行に至るまでの思い出をまとめておきたい。こうした記録を残すことが、次に同様の書籍を刊行する方々にとってもよい参考になるのではないかと考えている。

一　五十年史への思い

この書籍の編集委員会は、二〇一六年二月四日に立ち上がったが、その時点で私はそれなりのボリュームの「社会学部年表」を作っていたので、私自身の「五十年史」を編む作業は前年暮頃から勝手に個人的にスタートしていた。

なぜ私がこの仕事をぜひやりたいと思ったかというあたりから語らせていただきたい。原点は、二十六年前の、私が関西大学社会学部に赴任した一九九二年まで遡る。この年に、『関西大学百年史　通史編（下）』が刊行され、「上巻」とともに、新任教員だった私にも配布された。この「下巻」は「第八章　総合大学への躍進」から始まっており、その第七節で「社会学部開設」について当時の事情が詳しく語られており、非常に興味深く読んだ。また、第九章の「学園紛争と改革」も、社会運動の理論的・実証的研究を主たる研究テーマとしていた私には非常におもしろい章だった。一般論としての大学紛争についての本は数限りなく読んでいたが、自分がこれから勤める大学、学部の話だけに、言葉は適切でないかもしれないが、わくわくするような思いで読んだものだった。

また、この年は社会学部二十五周年に当たっていたが、二十五周年記念行事は前年の一九九一年十二月十四日にシンポジウム「二十一世紀の大学と学問」として開催されていた。当時すでに関西大学への移

籍が決まっていた私は参加の声をかけていただいていたが、当時の本務校の都合で参加できていなかった。その後、三十周年を迎える準備をしなければならない時期（一九九四年十月～一九九六年九月）に、学部執行部の一員であったが、当時の徳岡秀雄学部長は、「二十五周年をやったから三十周年は何もやらなくてよいだろう」という、ある意味妥当な判断を下されたため、そのまま三十周年は、年表をまとめたり資料を集めたりということすら何もしないままに過ぎてしまった。

四十周年を迎えた二〇〇七年も、数字的な区切りの悪さもあったのか、記念行事は行われたものの、年表作りや資料収集はなされないまま過ぎてしまった。実は、この頃から次の十年後の五十周年は、なんとしても年表作りや資料収集を行わないと歴史が残らなくなってしまうという危機感を個人的にいだいていた。

こうした大学内事情に加え、個人的な事情も、年史を作りたいというエネルギーになることがあった。それは、二〇一三年に父親の日記五十数年分を入手し、読んだことだった。父は一九九一年に亡くなっていたが、その後長く母が一人で住んでいた家を引き払うことになり、その前に保管していた父の日記を私に譲ってくれたのだった。子ども時代から青春時代、そして社会に出てからも、父は日記をまめにつけていた。それを読みながら、記録を残すことの重要さを改めて感じていた。

また、父は個人としての日記を残しただけでなく、旧制五高在学中には、五高の寮史編纂委員長を務めたり、会社でも役員時代に社史を編集委員長としてまとめあげるという仕事を行っていった。そうした父の仕事を知る中で、いつか自分も何か年史をまとめるような仕事をしたいと強く思うようになっていた。

そして、ちょうどよいタイミングで、社会学部創立五十周年がやってくることになり、実質的に立候補させていただき、編集委員長として「関西大学社会学部五十年史」を編む作業を始めたのだった。

二　通史とエピソード集をまとめる

教授会に承認された正規の編集委員会としての第一回の集まりは、二〇一六年三月二日に開催した。まずは、どのような内容にするか、外観はどのような書籍にするかといったことから検討を始めた。年表はすでに作り始めていたので、年表を入れるのはもちろんだが、それだけでは資料にしかすぎないので、やはり読み物として楽しめる通史や退職教員や卒業生の思い出の文章もあった方がいいだろうということになり、人選を進めることになった。また書籍の外観は、最近流行の大判の薄い冊子体よりは、厚みのある重厚な書籍をめざしたいという方向で意見が一致した。

通史は、最初は分担して編集委員全員で書くことも考えたが、分担の難しさや文章の統一性の問題などを考慮し、とりあえず私がたたき台を書き、それを編集委員に読んでもらい修正していく方向で進めていくことになった。私のたたき台となる通史は、九月十四日に開催した第六回編集委員会に提出し、その後いろいろなご意見をいただき、二〇一六年中にはほぼ完成することができた。以下がその内容である。

1．社会学部誕生までの歴史

戦前の関西大学と社会学／新聞学科の設置／社会学部構想の誕

生／二転三転する社会学部構想／ようやくまとまった社会学部構想／最後の難関／難産になった理由

2. 学園紛争時代

嵐の中の船出／社会学会問題／大学管理法／関西大学の改革を求める学生運動／機動隊導入とさらに続く混乱／正常化に向けての動き

3. 大学院社会学研究科の設置と四専攻体制

大学院の設置／産業心理学専攻の増設／三年次から専攻選択する時代のカリキュラム／専攻別入試導入後のカリキュラム／専攻別カリキュラムの完成

4. 一九七〇年代以降の学生たち

七年ぶりの学費値上げと過激化する反対運動／その後の学費値上げ反対運動／人権問題／荒ぶる社会学部自治会／社会学部自治会の終焉／社祭実の誕生

5. 社会学部の物的・人的充実に向けてのプロセス

学舎増築／エレベーターの設置／トイレの改装／情報機器の整備／教員スタッフの増員／教員スタッフの質の変化／事務体制の変化

6. 入試と広報活動

受験者数の推移／指定校推薦入学制度／スポーツ推薦入試とその他の入試／併設校と一般入試の拡大／積極的に展開される広報活動

7. 二十一世紀の社会学部

――カリキュラム改革と組織改革――

セメスター制度の導入と夜間部の廃止／ウェブ登録と体育の選択科目化／社会システムデザイン専攻への名称変更／心理学専攻への名称変更／心理学研究科の誕生／全学的改革への対応／メディア専攻への名称変更／社会学の危機／心理学部問題／関西大学社会学部の未来に向けて

この通史を書くにあたっては、『関西大学百年史』などの刊行された書籍ばかりでなく、退職された教員、あるいは学生時代から関西大学で過ごされた現役の教員、卒業生などからの聞き取り調査や、教授会議事録をはじめとする社会学部に残されていた様々な資料を利用した。調べれば調べるほど、話を聞けば聞くほど、次々におもしろい事実が出てきて、しんどさより楽しさが何倍も上回る作業だった。編集委員会でも、学部一期生で現在も現役教員としておられる東村髙良委員をはじめとして、しばしば秘話が開陳され、「そのまま通史には書けないですが、裏歴史あるいは秘話集みたいなものをまとめたいですね」という話になったものだった。

退職された教員に集まってもらって話を聞く会もぜひやろうということになり、退職教員懇談会を二〇一六年七月十六日に開催した。池田進先生、林英夫先生、佐々木土師二先生、髙木修先生、浅田正雄先生、岩見和彦先生の六名の退職教員と、現役の学部長経験教員九名が集まり、様々な話を聞かせていただいた。その懇談会に体調不良で急遽欠席となった石川啓先生に関しては、ご自宅まで訪問し、お話を伺わせていただいた。

卒業生で思い出の文章を寄せてもらう人は、各専攻卒業生四名と社

会学部同窓会関係者四名の二十名と決めた。ところがいざ依頼を始めてみると、昔の卒業生の中には、自分がどこの専攻に所属していたか、ゼミの先生が誰だったかも覚えていないという方もあり、こちらで調べなければならないというケースも出てきた。また、編集委員会の方で第二部の卒業生と思っていた方が第一部の卒業生で、急遽第二部卒業の方はもう一名探して二十一名にしなければならないといった事態も生じた。

退職教員にも卒業生にも、最初はざっくとした思い出の文章をお寄せくださいということで依頼していたのだが、編集が進むにつれ、それぞれの文章にタイトルをつけてもらった方がいいとか写真も付けた方がいいというアイデアが出てきて、そのたびに思い出の文章をお寄せいただいた退職教員と卒業生には追加の依頼をすることになったのだが、みなさん気持ちよく対応していただき、非常にありがたかった。全体に早めのスケジュールで動いていたのも柔軟な対応が可能になった理由だろう。

もうひとつ読み物として置かれている第三学舎の建物についての文章（「第三学舎竣工五〇周年を前に――建設から耐震改修まで――」）は、永井良和学部長がたたき台を書かれたものである。

三　資料と写真を集める

資料編は以下のような内容になっている。

1. 専任教員数推移
2. 社会学部執行部一覧
3. 学部人事委員一覧
4. 学部充実委員一覧
5. 受験者数の推移
6. 入学者数の推移
7. 専攻別演習担当専任教員一覧
8. 社会学部カリキュラムの変遷
9. 社会学論集・社会学部紀要掲載論文一覧
10. 経済・政治研究所社会学部関連研究班一覧

資料編は通読できるようなものではないので、ざっと見るだけにされる方が多いと思うが、私にとってはひとつひとつ思い入れがある。1の「専任教員数推移」は、単に数だけでなく、誰がいつどの職位で着任し、また退任したかを記録したかったので、『関西大学通信』やその前身の『関西大学学報』を丁寧に探して行くことになった。全員四月着任、三月退任なら簡単なのだが、十月着任の方もいれば、現役教員のまま亡くなられる方もおり、意外に簡単そうで面倒な作業だった。

2の「社会学部執行部一覧」はより面倒だった。最近は十月一日から翌々年の九月三十日までという任期がほぼ守られているが、学園紛争が派手に行われていた頃や、その余波が残っていた頃は中途半端な時期の執行部交代だったり、新たな役職が作られたりしており、この執行部一覧の表を作っているだけでも、この時期にこんなことがあったのかと初めて知ることが多かった。

3と4の「学部人事委員一覧」と「学部充実委員一覧」は、委員変更が制度上の問題だったり、個人的都合であったり、様々な事情で変

わっており、正確につかむのが、これもかなり面倒な作業になった。

5と6の「受験者数の推移」と「入学者数の推移」は、大学のデータが一番きちんとしているところなので、もっとも把握しやすい項目であった。ただ、学部創設当初は、学則定員、入学定員、予算定員がそれぞれ違っていて、「なんなんだ、これは」と驚きながら、記録を作ったものだった。

7の「専攻別演習担当専任教員一覧」を作るために、一九六八年秋の最初のゼミ履修要項からすべての履修要項を調べた。最初の六年間は産業心理学専攻がなかった時代だったが、ゼミ履修要項では最初から四専攻が存在するような書き方になっており、いかに心理学系の教員が忸怩たる思いを抱えて三専攻制に従っていたかがわかるようだった。演習のテーマも頻繁に変える人もいれば、ほとんど変えない人もいるのがわかり興味深かった。

8の「社会学部カリキュラムの変遷」は自分で言うのもなんだが非常に貴重な資料である。社会学部が誕生して以来の毎年のカリキュラムをすべて調べあげ、専攻別・履修学年別でカラーの表の形で示した。変化があれば新たな表としたので、表の数は全部で十七にも及んだ。履修学年別に色分けしてあるので、かつては上位学年にならないと専門科目が取れなかったのが、今や一、二回生でほとんどの専門科目が取れるようになっていることが、一目でわかる。このカリキュラム表は、教務に詳しいベテラン事務職員からも「先生、いいものを作ってくれましたね。過去のカリキュラムがすぐわかるのでありがたいです」と言われている。

9の「社会学論集・社会学部紀要掲載論文一覧」も、すべての『社会学論集』と『社会学部紀要』の目次をコピーしてスキャナーで取り込み、一覧表にするという作業だった。ただし、論文なので最終頁も入れなければいけないので、結局全論文の頁を雑誌本体で確認する作業が必要になった。また、目次に間違いや、その時々の編集方針の違いがあったため、一貫性のある正確なものにするのは、かなり面倒な作業となった。

10の「経済・政治研究所社会学部関連研究班一覧」は、当時経済政治研究所の所長を務めておられた髙瀬武典編集委員が、経済政治研究所に保管されていた古い資料を調べてたたき台を作ってくれたものである。

こういう歴史を描く本においては、写真が大きな役割を果たすので、写真をどのように集めるかに関してはいろいろ考えた。特に、学生の変化がわかる写真がほしいと思い、一九七二年から作られている卒業アルバムもすべて見たのだが、肖像権の問題もあり、そのまま掲載するのは難しいだろうという結論に達せざるをえなかった。結局、時代を表す学生の写真に関しては、思い出の文章を執筆してもらった卒業生に、学生時代の写真を提供していただくという方針で乗り切ることにした。

それ以外に社会学部の変遷がわかる写真として、学舎の変化がわかる航空写真と、社会学部教員の初期の集合写真と五十周年を迎える時点での集合写真を入れることにした。しかし、これだけでは何か物足りない気がしたので、歴代学部長の当時の写真を並べてみようと思い立った。ほとんどの学部長の写真は容易に見つかったが、第二代の学部長であった加藤三之雄先生の写真がなかなか見つからなかった。し

かし、年史編纂室にご連絡をしたところ、あっさりと「ありますよ」と言われ、安堵した。一人でも写真が揃わなければ、この企画はボツにしようと思っていたので、本当に助かった。歴代学部長の写真が並んでいる学部史はほとんどないのではなかろうか。

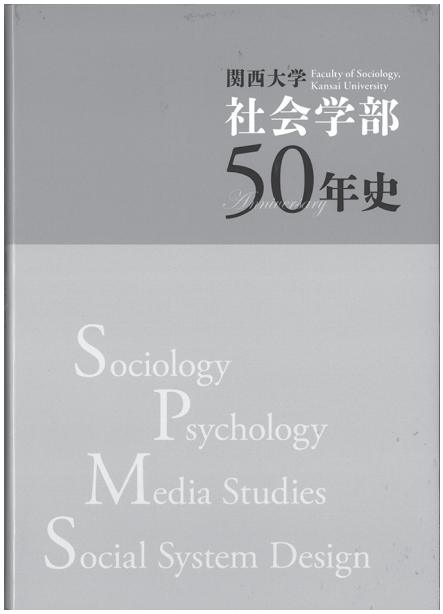
四　完成、そしてその後

関係各位の協力もスムーズであったため、順調に準備が進み、二〇一七年二月には原稿はほぼすべて集まり、印刷会社に渡すことができた。当初は、こちらの用意した原稿をほぼそのままの形で印刷してもらうつもりでいたが、刷ってもらった見本組を見ていたら、プリントアウトした時に感じなかった見づらさに何か所も気づくことになり、書籍としての見やすさを考えて表示の仕方を変更していった。幸い、印刷会社の担当の方が非常に熱心かつ好意的にこちらの要望を聞いてくださったので、最終的には見やすい書籍に仕上げることができた。

印刷会社との打ち合わせで最後に大きく変化していったのが、装丁に関してだった。当初、編集委員会が立ち上がった頃の想定では、カラー版三〇〇頁、箱入上製本ということであった。しかし、最終段階で、書籍の箱というのが茶色の簡易的な箱に過ぎないことがわかり、それではせっかくの書籍が死んでしまう気がしたので、箱をやめてカバーをつけるという方針に変更することになった。ここでも、印刷会社担当の方がこちらの細かい要望にしっかり応えていただき、何度もデザインを作り直してくれ、最終的には非常に美しいカバーデザインにすることができた。以上のようなプロセスを経て、『関西大学社会学部50年史』は、ついに二〇一七年九月三十日に完成した。

なお、この後の話も少し加えておくなら、この九月三十日に刊行された書籍は三〇〇部で、これは大学予算で作らせていただいたものなので、すべて関係者や他大学等への贈呈分だった。しかし、個別にこの書籍を購入して読みたいという人もいるだろうから、その分は別途増刷し、実費をいただこうという方針を決めていた。一冊一五〇〇円で大丈夫だということだったので、この立派な上製本がその価格で頒布できるというのはなんともありがたいことだと思ったが、実際はそうではなかった。

印刷会社と増刷についての細かい詰めをしていると、一五〇〇円の価格で作れるのは、上製本ではなく並製本の普及版だということがわかってきた。最初は、上製本との比較でずいぶん見劣りがするような気がしたが、考えてみれば、上製本が一五〇〇円では安すぎるのであ



り、たとえ並製本でも表紙には同じデザインのカバーがつくし、中身は一緒で見事なカラー版なのだから、これでも十分満足いただけるだろうという思いを持つことができるようになった。実際、この普及版を入手した私の知り合いは、こぞって「立派な本ですね。一五〇〇円は安いです」と言ってくれている。

この普及版を二〇〇部増刷して、興味を持った方たちに購入してもらい読んでもらっている。まだ普及版を作ってから四カ月ほどしか経っていないが、すでに三分の二近く捌けているそうだ。おそらく一年もしないうちに売り切れてしまうのではないかと思う。この本を編集するのに情熱を注いだ者としては、本当は、もっともっと増刷して関西大学社会学部を卒業した人全員に読んでもらいたいくらいの気持ちを持っているが、さすがにそれは無理な話である。ただ、総合図書館等で借りて読むことはできるので、ぜひ広く読んでいただければと願っている。

おわりに

関西大学社会学部二十五周年の年に赴任して丸二十五年務め、この社会学部の五十年史を編む仕事をすることになったのは単なる偶然ではあるが、ラッキーだったと思っている。赴任当初の頃は、社会学部創設のエンジン役となられ、その後十周年、二十周年の時には、詳しい年表作りや資料集めをされていた辻岡美延教授をはじめとする学部創設時から勤めておられた先生方がまだ現役教授としてたくさん在籍されていたので、過去の年表を作りながらも、具体的なイメージが湧きやすかった。

また、私が赴任した頃は、社会学部が変わり始めた頃で、専攻別入試が実施されて五年目、スポーツ推薦入試が復活して二年目、他学部との合格者の引き合いでようやく勝負ができるようになってきた時期だった。その後さらに大きく変化していく社会学部の後半期は、そのすべてを経験知として知りうる立場にあった。本当にちょうどよい時期に赴任してきたものだと思う。

二十歳から社会学を学び、ずっと社会学と名のつく組織に所属させてもらい、社会学と名のつく学部の五十年もの歴史をまとめる仕事に携わらせてもらったことは、この上ない喜びである。これまでに大学で数多くの仕事に携わってきたが、これほどやりがいのある仕事はなかった気がする。

次に、関西大学社会学部が区切りを迎える六十周年の時には、私はもう定年退職になっているので、この仕事に関わることはない。ただ、後輩たちがこの仕事を引き継ぎ、七十周年、八十周年、そしていずれ百周年へとつなげてくれることを期待するばかりである。どこまで見守れるかわからないが、愛する関西大学社会学部がますます発展することを祈りながら、この稿を閉じたいと思う。

（かたぎり　しんじ・社会学部教授／
関西大学社会学部五十年史編集委員会委員長）